

テーマ：死者の存在論をめぐって

オーガナイザー：青山拓央（山口大学）

提題者：鈴木生郎（慶應大学）、谷川卓（千葉大学）、吉沢文武（千葉大学）

趣旨：われわれがいずれ死ぬことは、おそらく間違いのない事実である。しかし、そもそも死ぬとはいかなることなのか。それは、存在の絶対的な終焉、すなわちわれわれが完全に存在しなくなるということなのだろうか。もしそうならば、かつて死んだソクラテスは現在まったく存在しないことになる。しかし、そう考えることは、すぐに次の問いを生じさせる。われわれはまさに今、ソクラテスに様々な性質を帰属できるように思われる。例えば、ソクラテスは、今現在、世界的に有名であり、われわれに尊敬されている。さらに、追悼されることや、死の害を被ることといった、人が死後にのみもつように思われる性質さえ存在する。しかし、もしソクラテスがもはや存在しないならば、こうした性質の帰属をどう理解すればよいのだろうか。非存在者が性質をもつことなどどうして可能なのだろうか。

では逆に、死はそもそも存在の終焉ではないのだろうか。ひょっとすると、死はわれわれの存在を脅かすものではなく、爪が伸びることと同様に、われわれに生じる単なる変化に過ぎないのかもしれない。例えば、もしわれわれが単なる身体であるとすれば、われわれは死後も死体として存在しつづけるだろう。しかし、こうした考えは、どこまで擁護可能なものなのだろうか。

このように死は、幾つもの、優れて形而上学的な問いを提起する。これらの問いに答えるには、時間のなかで存在すること、性質をもつこと、時間を通じて持続すること等についての体系的な形而上学的考察が欠かせない。そして、まさに現代の分析的形而上学は、こうした体系的考察を押し進め一定の成果を上げつつある分野に他ならない。したがって、死が提起する問題は、まさに分析的形而上学にとってその成果を試されるべき大きな課題なのである。さらに、こうした形而上学的問いが、死の害やわれわれの生の価値に関する倫理的諸問題とも密接に関連することをも考慮するならば、こうした形而上学的問題に答えることの理論的重要性も少なくないだろう。本ワークショップは、こうした現状を踏まえ、現代の分析的形而上学が死の提起する形而上学的問いに答えることにどれほど成功しているのかを明らかにすることを目指す。